

構想の実現状況等（概要） ※得られたアウトカムを含む構想の実現の観点から記載すること【1 ページ】

【Ⅰ. 事業全体の取組について】

東京藝術大学は“オール藝大”体制で本事業に積極的に取り組み、構想実現に向けて着実に進捗してきた。この10年に進めてきた取組について、構想調書に掲げた戦略実行にかかる4つの観点別に記載する。

1. インテグレーション【統合・集積】－組織整備、人事・教務システム改革等による全学での事業推進

2016年度に「国際芸術創造研究科」、「美術研究科グローバルアートプラクティス専攻」、「音楽研究科オペラ専攻」を設置し、国際共同カリキュラムの開発等、教育研究プログラムの高度化に向け活動を進めてきた。特に、国際芸術創造研究科や美術研究科グローバルアートプラクティス専攻では、渡日を要しない入試を実施するほか、英語での論文執筆を認めていることもあり、外国人学生の在籍が多くキャンパス環境のグローバル化を牽引する専攻へと発展を遂げてきた。2024年度入試では、他専攻に比べ高い倍率を記録し、国内外からの注目を集めている。また、教員人事計画の一元化を目指して2014年度に設置された「芸術研究院」は、人事計画の最重要組織として定着し、各教員の専門性を超えた教育研究の活性化に繋がっている。

2. コラボレーション【共同・共演】－海外一流大学等と共同で進めるグローバル人材育成・芸術活動

ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団、パリ国立高等音楽院、メトロポリタンオペラ、ロンドン大学、フランス国立映画学校等の一流の芸術家・研究者を計画的・持続的に招致し、特別講義・個人指導・共同成果発表等をカリキュラムの中に戦略的に組み込み実施してきた。

また本事業を機に開始した、教員と学生の海外渡航を伴う幅広い活動を支援する海外研修型授業「Arts Study Abroad Program」では、2023年度までに85件のプロジェクトを実施し、688名の学生が参加した。学内での評価も高く、本学ならではの国際交流プログラムとして発展してきている。

3. ディベロップメント【展開・発展】－芸術を核としたグローバルコミュニティの形成と発展

2016年度に「全国芸術系大学コンソーシアム」を本学の主導で発足し、2024年度現在、全国56大学が加盟する大学・地域の枠を超えたプラットフォームとなっている。本学の取組・成果を普及するとともに、スケールメリットを活かした芸術実践活動や人材育成共同プログラムを展開している。また、“上野文化の杜”新構想の中核機関として、産学官連携でアートフェスティバルや市民参加型の文化事業を実施するほか、国際芸術創造研究科では、グローバルな視座から芸術と社会との繋がりを探究しアートを通じた新たな地域社会とのコミュニケーションの場を生み出すなど共創社会を目指すプロジェクトを実施している。これらの活動を通じて、地域を中心とした国内ネットワークの強化、産学官連携によるリソースが集まるアートプラットフォームとしてのプレゼンスも築いてきた。

4. ブランディング【価値・プレゼンス向上】－世界のTOKYO GEIDAIとしての内外発信

本学創立130周年（2017年度）には今後10年の指針として「NEXT 10 Vision」を策定するとともに、各大陸を代表する芸術系大学長・学部長を招致した「五大洲アーツサミット」を行い、プレゼンスを高めた。2022年度には、欧州、アジア7つの芸術系大学、芸術系学科を持つ総合大学が共同で立ち上げた国際的な教育形態と研究ネットワークのための協力プラットフォームであるShared Campus（国際共創キャンパス）にフルパートナーとして加盟し、国際共修プログラムの実施などを通じたネットワークの強化に努めてきた。また、このネットワークを活用して、本学の主導によるShared Campus加盟校との共同声明の発信やプロジェクトの実施により、世界の芸術系大学におけるプレゼンスを確立してきている。

【Ⅱ. 事業期間での大学の成長（アウトカムとの繋がり）】

学内全体における多様な国際共同カリキュラムの開発・実施や海外一線級アーティストの招致、学内機能や実施体制の強化とそれに伴う“オール藝大”体制での本事業の積極的な推進により、学生による国際的活動の増加、キャンパス環境のグローバル化、国内外におけるプレゼンスの向上、日本全国の芸術系大学・機関との協働によるグローバル化の展開といったアウトカムが得られた。また本事業により大学の国際化や学生の流動性の向上がなされたことで、“藝大力”を国際社会に発信し、「世界のTOKYO GEIDAI」としてのブランド及びプレゼンスを確立してきている。とりわけ「国際芸術創造研究科」や「美術研究科グローバルアートプラクティス専攻」への入学希望者の増加や、外国人留学生数の大幅な増加（事業開始当初より約2.8倍に増加、全学生の約1割を占める状況の恒常化）は、本事業によるアウトカムを数値面でも裏付けるものである。本学の在り方に合わせた大学改革と本学ならではの強みを活かした国際化により、国際通用性と国際競争力のある、世界から注目を集める大学へと成長を遂げてきた。

特筆すべき成果（グッドプラクティス）【1ページ】

【Ⅰ. 事業全般について】

Shared Campus フルパートナーへの加盟と A7 (Arts 7) の創設

2022 年度に Shared Campus（国際共創キャンパス）にフルパートナーとして加盟し、このネットワークを活用して国際共修プログラムを実施するなど世界の芸術系大学との連携を強化してきた。2023 年度には、世界の主要国首脳が集う G7 サミット広島開催に合わせ、本学の呼びかけにより、日本発の国際貢献として、Shared Campus メンバーを中心に世界の芸術系大学と連携して A7 (Arts 7) を創設した。第 1 回の A7 サミットでは、7 つの芸術系大学学長のメッセージをメタバース上で公開するとともに、A7 の大学から推薦された世界平和をテーマとする学生の作品をメタバース空間に展示する東京藝大アートフェス 2023 を実施した。

ダブルディグリープログラムにおいて本学初の修了生を輩出

本学は、2021 年度に最初のダブルディグリー協定を締結して以来、2024 年現在 3 大学とダブルディグリープログラムを推進している。そのうち、美術研究科グローバルアートプラクティス専攻がタイ・シラパコーン大学と進める博士後期課程のダブルディグリープログラムにて、2023 年度に初の修了生を輩出した。

世界的コンクールでの学生の入賞

本事業期間に在学した卒業・修了生や在学生の世界的コンクールでの入賞が数多くみられ、本事業での学生の国際的活動の増加やキャンパス環境のグローバル化による成果であると考えられる。以下はその一例。

シュトゥットガルト国際アニメーション映画祭・入選（2017）/ ミュンヘン国際音楽コンクールピアノ三重奏部門・優勝（日本人初）（2018）/ アドルフ・サックス国際コンクール・第 1 位（2019）/ ミュンヘン国際音楽コンクールチェロ部門・優勝（日本人初）（2019）/ ミュンヘン国際音楽コンクールヴァイオリン部門・優勝（2021）/ エリザベート王妃国際音楽コンクール（ピアノ部門）・入賞（2021）/ ジュネーブ国際音楽コンクール作曲部門・第 2 位（2022）/ オタワ国際アニメーション映画祭（短編部門）グランプリ（2021、2022）

ベルリンフィルハーモニー・カラヤンアカデミーとの人材育成に係る協定（特別選抜制度）による派遣

本学の音楽分野における人材育成の特色は、早期教育プロジェクト、ジュニア・アカデミー、SGH に指定された附属音楽高等学校を含む幼少期からの一貫した音楽教育であるが、2018 年度には、世界最高のオーケストラの 1 つであるベルリン・フィルハーモニーが設置するカラヤン・アカデミーとの間で人材育成に関する協定を締結し、世界初の取組として同アカデミーヴァイオリン部門に「藝大枠」を獲得、修了生 1 名を同アカデミーへ派遣した。その後 2022 年度まで 3 名を派遣している。

創立 130 周年記念「五大大陸アーツサミット」の開催

創立 130 周年（2017 年）には、集中的に対外発信を行い、その 1 つとして、北米、南米、ユーラシア、オセアニア、アフリカの各大陸を代表する芸術系大学長・学部長を招致した「五大大陸アーツサミット」を開催した。芸術の重要性や 21 世紀のアーティストの役割、グローバルなプラットフォームの構築、グローバルアーティスト育成のための幅広い教養とその基盤整備、芸術と科学の融合等について活発に討議を行った。

【Ⅱ. コロナ禍への対応について】

本学は実技系の大学であるため、コロナ禍での教育活動の遂行には試行錯誤が続いたが、学生へのアンケート実施などを通じて改善を図りながら、オンラインも活用しつつ学内外各種の国際交流事業を継続する工夫を重ねてきた。2021 年度には「東京藝大インタラクティブアジア 2021」を開催し、アジア地域との国際交流に焦点をあてたオンラインでの国際シンポジウム、芸術分野ごとのテーマによるディスカッションを行い、連携校の教員や学生が参加した。さらに、本事業当初より実施してきた海外研修型授業「Arts Study Abroad Program」では、オンラインでの取組を行ったほか、外国人留学生と日本人学生の交流イベントもオンラインで実施した。また、ICT を活用した新しい表現やコミュニケーションを追求し、学生や一般の方々が集うデジタル空間として、オンライン上のバーチャル・キャンパス『東京藝大デジタルツイン』を制作した。大学キャンパス内はもとより、大学美術館での卒業制作展、奏楽堂での演奏会等、感染症対策により入場制限がされる状況でも体験できる、新しい形のコミュニケーションの場を創設した。さらに、活動自粛により多くの芸術家が経済的な影響を受けたことに伴い、在学生を含む若手芸術家への支援として実施したクラウドファンディングにおいて約 3,700 万円の寄付をいただき、コロナ禍での芸術活動支援を強化した。